

発表題目「菩薩の信について—仏もまた過去仏の仏弟子か」

仏弟子（声聞）が仏道修行を開始するのに、如来の菩提、つまりブッダが本当に覚った者であることを信じていなければ、彼にとってブッダの説く法も、それに従って修行するサンガも虚しいものとなろう。信がなければ、そもそも修行ははじまらない。それゆえ仏弟子の仏道修行には信が不可欠であることは疑いない。

しかしながら仏自身（独覚も含む）は菩薩の時に信を具えているのか、具えているとすれば、何に対する信を持つのか。これが本論の出発点となった疑問である。

菩薩は初発心時に過去仏を前にして誓願を立てなければならないといった教義を前提にしてしまえば、このような問いは、もはや問うに値しない。アッタカターには菩薩の信はブッダになることを決意した時から来ているから「到来の信」（*āgamanasaddhā*）であるとされ、菩薩に信があることをはっきり述べている。この到来の信が何を対象としているのか現時点では定かではないが、これが過去仏を対象にしたものであるとすれば、菩薩は過去仏の仏弟子であることになろう。

ところが聖典には明らかに上記のような教義が成立する以前の思考の痕跡が認められる。聖典中、釈尊が回想して自身の成道の経緯を語る中で信が言及されるのは、直接菩提に関係しない特定の文脈であり（アラーラ・カーラーマのもとで「私にも信がある」と）、また釈尊の出家の動機を示す定型表現としては「何かしら善を求めて出家した」が知られており、これも信と関わりのない表現であろう。ヴィパッシ菩薩の四門出遊が語られる中でも、特に信が強調されることはない（かえって「信仰は種である」などと、成道後のブッダについてブッダが信をそなえることを述べる記述がある）。

『人施設』などの正等覚者と独覚の定義によれば、仏自身と独覚は「未だかつて法を聞いたことがなくて」自ら覚らねばならない。両者の違いは一切知の有無、そして、十力において自在か否かにのみある。正等覚者と独覚は仏法に対する信をそなえて仏道修行のスタートを切らないことになる。

このことは、先述の教義と矛盾しているのではないであろうか。菩薩は成道以前に、三明、特に宿住随念智を獲得するので、その際に過去仏から聞いた法をも思い出すであろう。すると「未だかつて法を聞いたことがなくて覚る」という規定は無意味にならないであろうか。

キーワード *Puggalapaññatti*、*saddhā*、*kiṃkusalagavesin*